鳥取の民話

67

収録・解説　酒井董美（ただよし）

教育機能の意味持つ昔話

貧乏神

（八頭郡智頭町波多）

語り手　大原寿美子さん（明治40年生）
昭和54年10月7日収録

あらすじ

昔、横着なお母さんがおった。子どものおしめは庭へ放っておき、ほんに汚うしてたちよった。その家は、貧乏で難儀でこたえん。大歳が来たって横着なじゃけん、庭を掃こうとも、座敷の戸を拭こうともせん。

ちいと離れたとこに分限者がおって、下男や下女を使うておるしして、そうしよったら「大歳にゃ、きれいにせにゃいけんじゃ」言うて、おかみさんが言われて、拭いてきれいにした。

そして「きれいにしましたけど」て言うたら、「旦那さんが見てごされりゃえええけど」言うたら、「まあ、出て見んしゃいなあ」言うて。

そいから旦那さんが出て見られたけど「みなきれいにしてくれたなあ。これでほんに大歳のようなええなあ」、旦那さんもおかみさんも喜んで見てごされた。

庭の隅に掃きだめがあって、「どっこもきれいなけど、そこへ掃きだめがあるがなあ」言うたら「ほんです。ほんです」言うて、女中がじきぃ箒（ほうき）と篦（へら）を持ってきて、それを取ってしもうて、きれいにした。

そうしたら貧乏神が言うことには「どこへおろう思うて大歳にゃ、まっぽう回りよるけど、この家にはうらのおるところはねえ。そうして庭の掃きだめへ立っとったけれど、その掃きだめを取ってしもうたらおり場はねえ」言うて出てしまった。

その横着な横着なおかあの家にゃあ、貧乏神がみんな行って貧乏するじゃちゅっだけえ、とにかく大歳の晩にはなあ、きれいにしまあいこと。日々が晩のしまいことには、座敷と庭ぁ掃いて掃きだめぇいうことをすんなよ。

「そいじゃけえ、掃きだめを取るじゃで。大歳の一年中の晩のしめぇこと同しこっちゃけえ、掃きだめを取るじゃで」言うて。

そして、家でも言いよりました。

「そんな汚ねぇ、その家へみな貧乏神が行って、その長者にゃあ、おるところがなかったとや」言うて。

今でも、その大歳の晩にゃ、きちーんと掃いたり拭いたりして、そして掃きだめぇいうことは、ちょっともおかんようにして、子どもらあにも教えますじゃで。それで貧乏神が、おるとこがなかっとや。

そればっちり。

イラスト・福本隆男

解説

昔話の中には、それとなく秘められた教育的機能があるが、この話などは典型的な事例だといえる。子どもたちにさりげなくこの話を聞かせて、自然に掃除をしようという習慣がつくことを期待しているのであろう。

学校教育制度のなかった昔においては、このような昔話は人々にとって非常に重要な教育機能の意味を持っていたのである。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。